

ちっちゃな「イエ」

北海道は広いというイメージがあり、人口密度の低い雄大な景色がその特徴となっています。一方で、北海道人には、合理性からくる尺度を追求する反面、茶室にみられるようなヒトの手足を延長した濃密で細やかな空間に対する意識が弱いように思えます。

豊かになったと思われる今日、家を構成するあらゆる要素を見直し、そぎ落としの上で、スケールをリセットして、何が残るか、もう一度考えてみませんか。

北のゆるーい「いなか」や「まち」の中で、とぎすまされた「イエ」を提案してください。そこから、新たな拡がりが見えてくるかもしれません。

計 画 条 件

- 北海道内の地域と敷地、住戸形式、家族構成等は自由に設定してください。

賞 金

- 最優秀賞 25万円（1点）
- 優秀賞 5万円（2点）
- 奨励賞 2万円（4点）

締 切

- 2017年8月17日（休）持参の場合は16時必着。
なお、土曜日、日曜日及び8月14日（月）、15日（火）は、受付できません。
郵送の場合は17日消印有効。

参 加 資 格

- 一般、学生等を問いません。
- 北海道内居住者とします（学生・生徒は北海道内の教育機関に在籍している者に限ります）。
- 個人参加、グループ参加は自由です。

提 出 物

- 図面
作品名、設計趣旨及び設計意図を表現する図面（縮尺は自由）。図面には、氏名、記号、サインなどを記入しないでください。A1（841×594）サイズ一枚、横づかい。表現は自由です。ハレパネ又はステレンボード（厚さ5mm程度）などでパネル化してください。
- 返信用ハガキ
受付番号をお知らせするために使用しますので62円の官製ハガキに応募者の住所、氏名を記入して提出してください。
（官製ハガキ以外は、受付できません。）
- 応募用紙
応募作品の「作品名」と応募者の郵便番号、住所、氏名（フリガナ）、所属先名（学生は、学校名・学年）、電話番号をA4版の用紙に記入して（形式は自由）応募作品とともに提出してください。

審査委員 (委員は五十音順)

委員長 米田 浩志

北海学園大学工学部教授

委員 赤坂 真一郎

㈱アカサカシンイテロウアトリエ代表取締役

委員 小澤 丈夫

北海道大学大学院工学研究院教授

委員 小西 彦仁

ヒココニシアーキテクチャ㈱代表取締役

委員 佐藤 孝

北海道科学大学工学部教授

委員 澤田 貞和

㈱日本工房代表取締役

委員 松田 真人

㈱都市設計研究所代表取締役

選考経過

①一次審査 (2017年8月23日～25日)

一次審査通過者の受付番号は8月31日(木)に主催者ホームページ (www.do-kjk.or.jp/) で発表します。

②二次審査 (2017年9月6日10:00～)

一次審査通過作品からベスト10を選出します。

③最終審査 (2017年9月6日13:00～)

二次審査通過作品 (ベスト10) から各賞 (7作品) を決定します。

最終審査は「公開審査」とし、札幌全日空ホテル23階白樺で行います。

入賞者発表

・2017年9月中旬

入賞者に直接通知するとともにホームページでも発表します。

入賞作品の展示等

①2017年10月23日(月)～10月27日(金)

大五ビル 6階ホール(札幌市中央区大通西5丁目11)

②2017年11月17日(金)～11月19日(日)

札幌地下街オーロラタウン

・1次審査通過作品は、協会広報誌「ひろば」(12月発行)に掲載します。

また、最優秀賞の方には、同誌への寄稿をお願いしています。

入賞者名簿

最優秀賞 河 中 宗一郎 北海学園大学大学院2年

優秀賞 櫻 井 太 貴 室蘭工業大学大学院2年
(共同作品) 佐 藤 由 花 室蘭工業大学大学院1年

優秀賞 中 山 琴 未 有限会社伊達計画所

奨励賞 加 持 あ ゆ 札幌市立大学2年

奨励賞 南 嗣 美 北海道科学大学大学院2年

奨励賞 樫 村 圭 亮 北海道大学大学院2年

奨励賞 櫻 井 太 貴 室蘭工業大学大学院2年

応募作品の著作権等

- ・応募作品の著作権及び版権は、応募者のものとします。ただし、この事業の趣旨に基づいて、主催者が図書の出版や、新聞、雑誌、その他に掲載又は啓発宣伝などに利用する場合は無償で認めるものとします。
- ・応募作品は原則として返却しません (返却希望の場合は、事務局に相談してください)。

主 催

(一社)北海道建築士事務所協会

後 援

北海道

(一財)北海道建築指導センター

(一社)北海道建築士会

(公社)日本建築家協会北海道支部

(一社)日本建築学会北海道支部

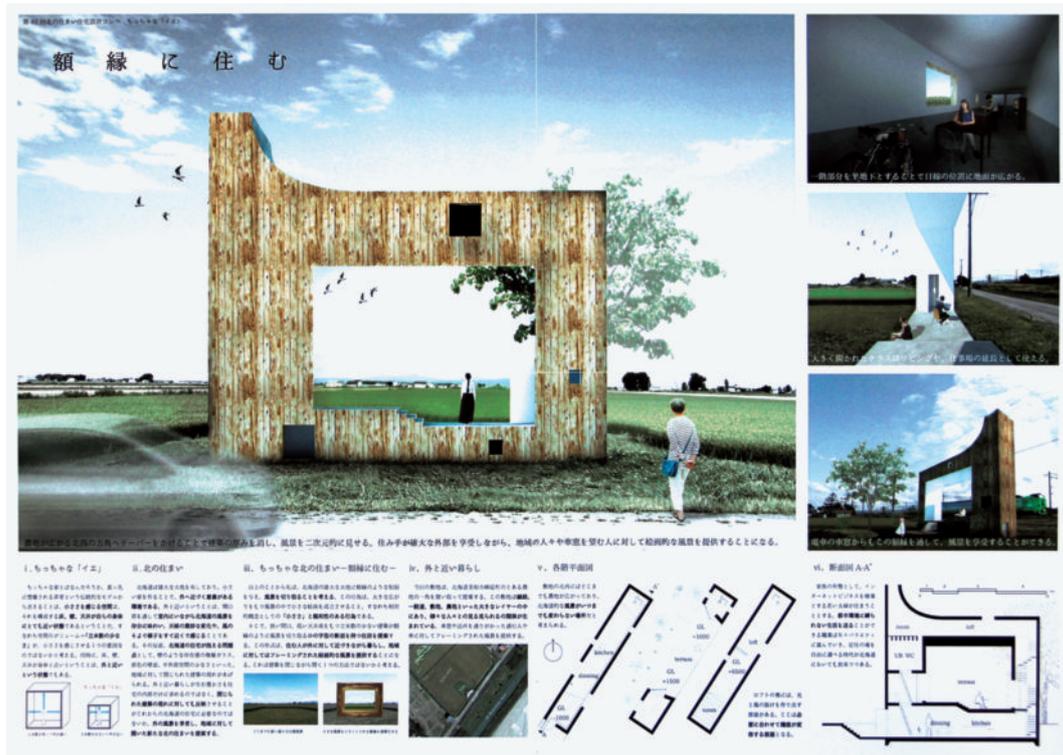
㈱北海道建設新聞社

最優秀賞

「額縁に住む」

河 中 宗一朗

北海学園大学大学院 2 年



パネルを見た瞬間、その鮮烈なイメージにはっとさせられた。

線路と併行する道路沿いに置かれた大きな木製の額縁。そのむこうには、広大な農地と青空が広がり、額縁の中に佇む人の姿は、空を飛ぶ鳥と共に景色の一部として切り取られている。そこに佇む人だけでなく、車や列車でその横を走り抜ける時に一瞬間間見える風景は、多くの人に強い印象を残すことになるだろう。

額縁の中に納められた生活空間は、平面、断面ともに最小限の寸法に押さえられている。下階は半分が地下に潜り込む主室、上階のロフトは寝室にあてられ、それらを階段と水廻りがつなぐ。トップライトから注ぐ光は、内部空間に様々な陰影効果をもたらす。最小限でありながら、楽しく魅力的な生活空間である。

課題のポイントは、「スケール」をどう扱うかにあった。本案は、設計者の研ぎすまされた感性とデザイン力によって、サイズが絞り込まれた“ちっちゃな「イエ」”が、雄大な大地の風景と有機的、魅力的な関係を結ぶことに成功している。応募案の中でも群を抜いて秀逸で、審査員全員が一致して推した最優秀案である。

審査委員 小澤 丈夫

優秀賞

「マドのイエ」

櫻井 太貴 (室蘭工業大学大学院2年)
佐藤 由花 (室蘭工業大学大学院1年)

(共同作品)



森にあり湖畔にある、自然を傍受するイエである。そのイエは、周りの樹木の根を避けるように極力接地面積を小さくして、上にいくほど枝葉のように光景を広げる建築である。そして正方形に三角形を重ねたプランが、少ない床面積ながら外気に触れる量を大きくしている。作者はこの建物を塔と称しながらもまるで「木」である。

地面では草や土、虫を見つけるくらい近い距離のマドがあり、突き出た床マドを開けると花が手に採るような近さにある。突き出た部屋のコーナーの「マド」からの視線は水平、上下に展開して自然をパノラマから手にとるような自然まで触れる。それを作者は「自然の豊かさを繊細に拾う」とコンセプトを結んでいる。

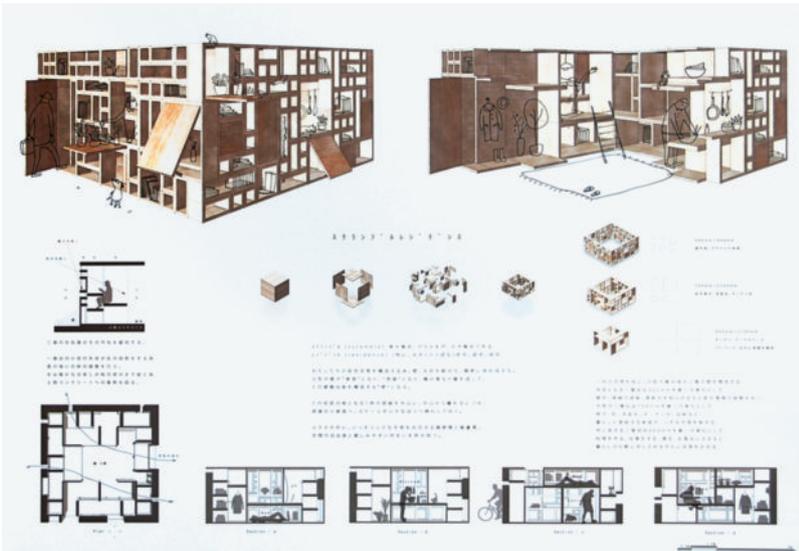
審査委員 佐藤 孝

優秀賞

「スクランブルレジデンス」

中山 琴 未

有限会社伊達計画所



一坪のコアを中心にして、徐々にスケールダウンする口型の立体が三層の壁を構成し、不思議で優しい居住空間を形成しています。

そもそも住宅とはヒトの手足の延長のような、洞穴のような、胎内のような空間だったのかもしれませんが、まさに、「ヒトの手足を延長した濃密な空間」が実現できています。間延びした無責任な無機質な空間ではなく、スケールがリセットされた密着して有機的な空間が提案されています。

どこかのCMのように、ヒトは天井の高い家ではなく、狭いトコロが好きなのかもしれません。ケモノの恐怖から幾重にも守られたこんな住まいが欲しいのかもしれない。現代のケモノとは何なのかを考えさせてくれる作品です。

もし、ヒトの手足の延長のような空間から、宇宙の広がりが見えれば、この作品が金の射止めたのかもしれない。

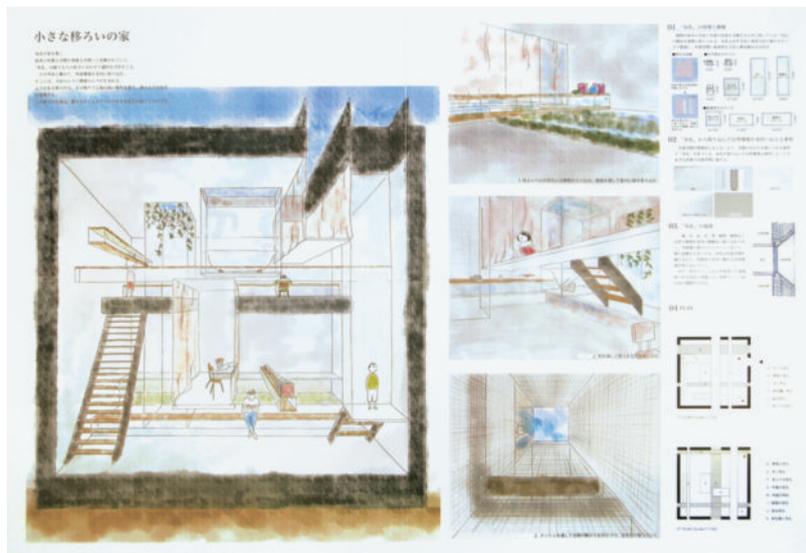
審査委員 松田 真人

奨励賞

「小さな移ろいの家」

加持 あゆ

札幌市立大学 2年



キュービックな空間に様々な機能を持つ「気孔」と称するチューブが、その空間を貫通している。住人はもちろん、外部の情報、空気や光、雨や雪、植物や動物、昆虫など様々なものがここを通過する。また、チューブのスケールで生活の道具としても机になり椅子となり書棚になってもある。

このように様々な「気孔」が縦に横にと貫通して空間をゾーニングするとともに内包された空間に風景を送り込んでいる。本来外壁面につくられる開口部とは明らかに違う光のグラデーションが発生し、空間は光によるゾーニングがなされるだろうと想定できる。心地よい場所を探しての生活は楽しみである。何れにしてもこの発想は賞に値する。

審査委員 小西 彦仁

奨励賞

「6つのキャラクターと私は暮らす」

南 嗣 美

北海道科学大学大学院 2年



周辺から拘束されることのない自由な形状の空間が、キューブ状のモノリシックなヴォリュームに納められている。手の届かない距離にある開口の先には、外部の樹木や空が見える。トンネル状の閉じた空間の中、開口を通して注ぐ自然光が曲面をなめるように照らす様子は、やや秘密めいた地下基地のようなものを連想させ興味深い。様々な形状と大きさの空間を自由に組み合わせ、個別の空間と人の住まい方との関係やありようを丁寧に探求することによって、新たな住宅の個性が生まれる可能性はある。本案は、そのような視点からスタディされた実験的な試みとして評価を受けた。

一方で、このプレゼンテーションからは、設計者が各空間のもつスケールをきちんとコントロールできているかについて、十分な確信を得ることができなかったこと、各空間の使われ方や個性について、工夫の余地が残されていることが気になった。

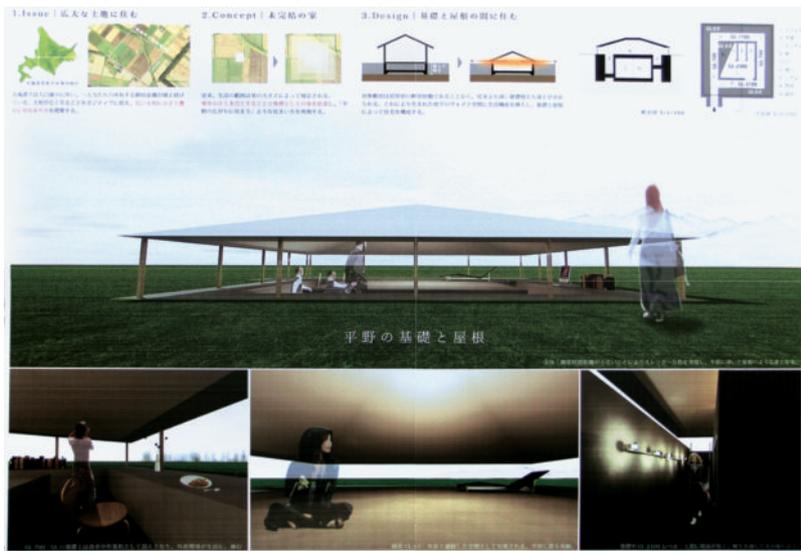
審査委員 小澤 丈夫

奨励賞

「平野の基礎と屋根」

櫻村圭亮

北海道大学大学院2年



大地を駆け抜ける宛転たる風のごとき作品である。田畑に隠された小さな居場所から、草花目線で眺める北の大地は想像以上の広がりを持つだろう。

提案を担保する敷地選定や合理性を持った造形選択は、適度なリアリティがあり好感が持てる。面積的に削ぎ落とされた提案であっても空間的魅力を失わず、四季を通じて豊かな生活が期待できる平・断面計画であることも評価したい。

審査委員 赤坂真一郎

奨励賞

「地に棲息する家」

櫻井太貴

室蘭工業大学大学院2年



敷地は郊外住宅地の防風林中、森の中を思わせる自然を感じる場所である。ここに10m角の住まいを計画している。

屋根に特徴があり、そこに設けられた明かり採りから光を室内に取り込む計画である。

明かり採りの高さ・大きさ・傾き・方向を変えることで多様な光が降り注ぐ。内部から見た時、その光は時間によって変化しながらも明るさは勿論、柔らかさや広がりがあり内部空間を相対化し、その時の居場所を決めさせる。外壁に窓が少なく、実際は暗い気がするが、光により間仕切る手法は興味深い。

空間に無駄をもたらさず壁を造らず、シンプルに仕切る手法は、ちっちゃないえのテーマにも合致し、好感の持てる提案の一つとして評価できる。

審査委員 澤田 貞和

2次審査通過作品

中西 慶 侑

北海道科学大学大学院 1年



景象の空隙



渡 邊 憲 成

北海学園大学 2年



野口 翔太 (室蘭工業大学 4年)
福山 将斗 (室蘭工業大学 4年)

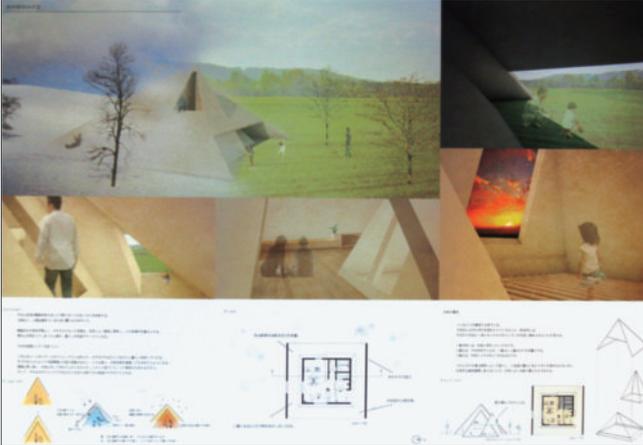
(共同作品)



1次審査通過作品

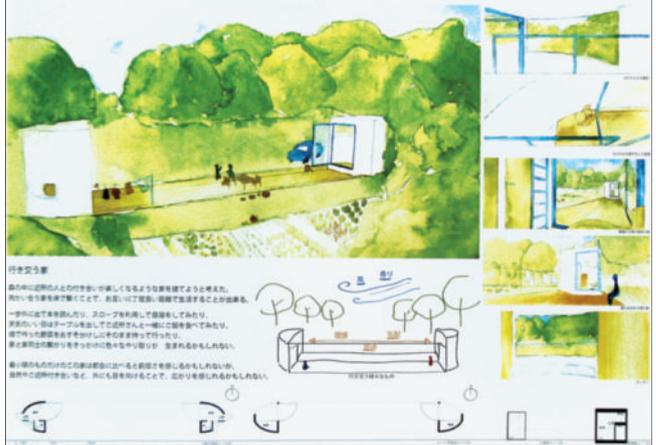
高嶋 健伍 (室蘭工業大学大学院 2年)
向山 友記 (室蘭工業大学大学院 1年)

(共同作品)



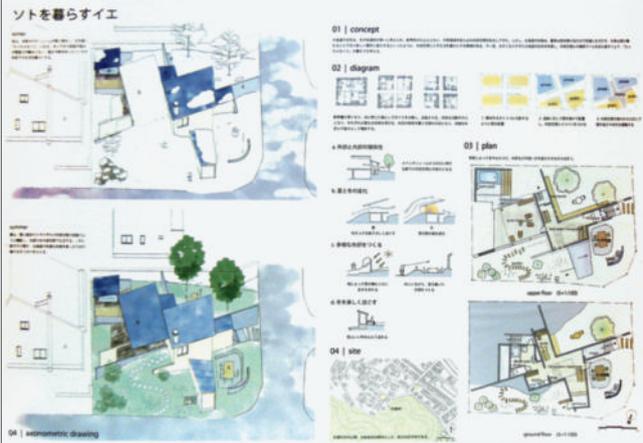
山本 沙奈

学校法人美専学園北海道芸術デザイン専門学校 2年



吉田 拓 (北海道大学大学院 1年)
林 泰佑 (北海道大学大学院 1年)

(共同作品)



茂泉 悠希斗

北海学園大学 4年



伊藤 拓海 (北海道大学大学院 1年)
村田 知謙 (北海道大学大学院 1年)
宮本 宏樹 (北海道大学大学院 1年)

(共同作品)



戸田 啓太

室蘭工業大学大学院 2年



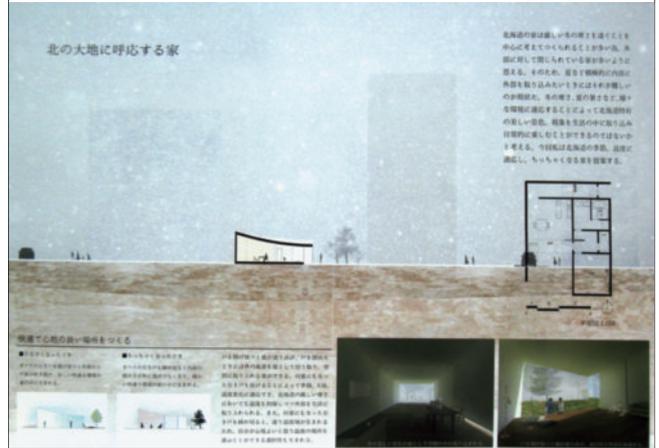
會澤 拓磨 (北海道大学大学院 1年)
 押川 快 (北海道大学大学院 1年)
 羽田 崇人 (北海道大学大学院 1年)

(共同作品)



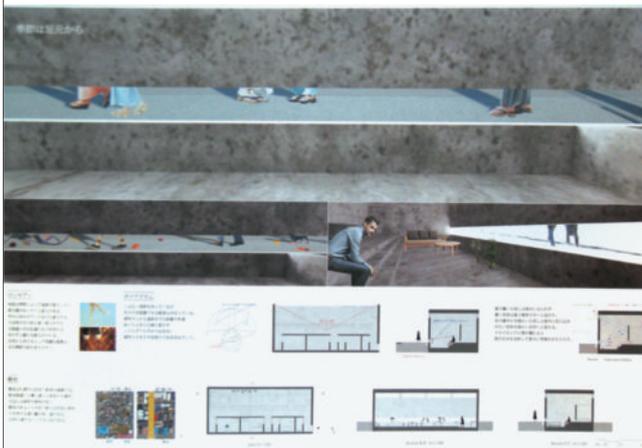
板東 千尋

北海学園大学 3年



杉田 涉伍

北海道科学大学大学院 1年



公開審査



表彰式

総 評

建築空間の拡がりとは、単純に数値として置き換えられるものではない。空間の配置や構成、あるいは素材や色彩の選択によって空間の拡がりの印象を大きく変えることができる。住宅を中心にとらえていくと、過去の名作といわれる作品群は、空間の拡がりの操作性にそれぞれ特徴を有している。その操作性を改めて見つめなおしながら、風土との関係性を問いかけたのが今回のコンペの課題であった。

第42回北の住まい住宅設計コンペ（略称キタスマ）のテーマは、『ちっちゃな「イエ」』であった。ちっちゃな、という形容詞は、言葉の容易さを通して、既存の観念にとらわれない様々な解釈の可能性を提示したものである。ちっちゃなという用語には、小さい、狭い、低いなどの数値に結び付く印象を与えるが、今回はその意味だけではなく、建築の制限性を自覚することによって得られる、空間の拡がりに対する新たな視点への期待があった。日本の歴史的な建築形式を前提にすると、室町末期から桃山期にかけて発展・完成した茶室建築にその原点を見出すことができるかもしれない。この茶室建築は極めて限定されたミニマルな空間において、実感としてあるいは想像としての拡がりを実現した建築形式といえる。その拡がりを生み出すために、北海道という風土において、どのような建築形式として実現できるのかを模索すべきテーマであった。

今年の北の住まい住宅設計コンペ応募締め切りは、8月17日であった。応募総数は59作品であった。この応募総数はここ数年においては平均的な数といえる。その後、一次審査が8月23日から25日までの三日間で行われた。この審査段階においては、各審査委員が全体から7作品を選出することが目的とされた。その結果、19作品が審査対象作品として選ばれた。二次審査会は、9月6日の午前中に開催され、各審査委員が各作品の評価を行い、審査委員間で議論を重ねながら、ベスト10入賞作品を選出した。ベスト10入賞選出は、今年から新制度として導入したものである。その後、同日の午後に最終審査会が公開の場として開催された。多くのオーディエンスを前にしながら、審査を進め、さらに絞り込むための議論が重ねられた。最終的には投票を繰り返しながら、最優秀賞作品1点、優秀賞作品2点、奨励賞作品4点が決定した。

最優秀賞作品（河中案）は、最終審査において満票が得られ、各審査委員から最も評価された作品である。北海道という大地、そして風景を背景にしながら、その大きな存在と融合するかのようにより、建築によるフレーミングが活かされていた。切り取られた余白空間が住宅の機能に接続している建築操作は見事であった。北海道の風土における新たな建築形式の一つである。優秀賞作品（櫻井、佐藤案）も秀逸な作品であった。断面形状を巧みに操作し、ミニマルな多様な空間がそれぞれ活かされていた。各空間には、特徴のある開口部が設置され、それぞれに人のスケールや行為が反映した空間となっていた。優しいリアルさを与えていたのが印象的である。もう一つの優秀賞作品（中山案）は、スケールの操作が特徴的であった。住宅空間を限りなく家具空間に接続させながら多様な居場所が作り上げられていた。図面からだけでは読み取れないであろうイレギュラーな空間を体験してみたいと思わされる作品であった。奨励賞作品4点もそれぞれ空間構成やスケールの操作に特徴を持っていた。今回の課題に十分に答えている作品であった。

今年も、応募作品それぞれの方法論によって北の住まいのあり方が追求されていた。様々な切り口によって提案される作品群からは質の高さが実感させられた。このような質の高さを生み出し、維持するための熱意は、社会の更新行為として必要不可欠のものである。そして、この熱意は、歴史や世代と連動させるための、有機的な生命力として受け止めることもできる。北海道の住まいの可能性を改めて実感させられた機会であった。応募者皆さんの今後の活躍を期待したい。

審査委員長 米田 浩志

最優秀賞に受賞して

第42回北の住まい住宅設計コンペ最優秀賞受賞者
河中宗一郎（北海学園大学大学院2年）

第42回北の住まい住宅設計コンペにおいて最優秀賞をいただいた。今回の受賞に際して、この誌面に寄稿文を書く機会をいただいたので、今回の受賞作品について、また、キタスマコンペの特性と、今回の作品の紹介、受賞の感想をお話しできればと思う。

今回のキタスマコンペの課題タイトルは「ちっちゃなイエ」であった。課題に関しては、私が最初にキタスマコンペに応募した第38回「私の家」、さらに第39回「空気のかたち」、第40回「住宅再考」、第41回「距離の家」など、それぞれ大きく異なったテーマを課題のタイトルに冠していた。しかし、その裏では、やはり一貫して、「キタスマ=北の住まい」を設計せよ、ということが前提条件として存在するのは認識すべき事実であろう。一見、建築における普遍的なテーマを扱おうとしているように見える課題タイトルであるが、ひとたび「北の住まい」が付け加えられれば、我々が思考する建築は、北海道特有の自然や冬を意識して設計せざるを得なくなる。翻って、そこから新しい空間形式が生まれてきたということもまた事実である。言ってみれば、北国を前提としたクリエイションから新たな普遍性が生まれるということが、このコンペの特質なのではないかと提出された作品群を観て感じられる。

さて、そうなると、「北の住まい」を前提とした「ちっちゃなイエ」ということになるのであろうが、今回は「ちっちゃな」に対する回答として、あくまで従来の人間的スケールを拠り所とした小ささ、つまり、実空間としての気積の小ささを提案しようとした。私は気積の小ささに関して、「外の風景をより近く感じる」こととも捉えた。このことは同時に、北海道という土地は、豊かな外部空間（自然）を有しているため、外と近づきがいのある環境であるともいえよう。そこで私は、北海道特有の雄大な自然の風景を媒介とするような「額縁」を設計に取り入れることとした。額縁は本来、絵画作品や写真を緊張感のある縁によって、鑑賞物として仕立てるものである。つまり、北海道の広々とした大地に対してフレーミングを行うことで、雄大な大地を際立たせながら、額

縁に倣った繊細な枠を立体化することで、気積の小さな空間を獲得できるのではないかと考えたのである。具体的には、敷地を北海道美唄市の田園に設定し、間口2000mmの中心に大きなヴォイドを備えたボリュームを道路沿いに配置した。その中心のヴォイドには、北海道の雄大な景色が切り取られ、テラス空間となる。また、生活者がドーナツ状の空間を断面的にめぐることによって、実空間の狭さ以上に、おおらかさを感じることができる住まいとなる。

この作品において、もう一つ重要なのは、この敷地特有の道路や田園、その中を走る線路が織りなす大きなレイヤーの中にこの建築が存在していることであろう。中心のヴォイドの大きさは、周辺地域に住む住人、道路を走る車、線路を走る電車の車窓のすべてから風景が切り取られるように設定している。額縁によって、大きなレイヤーを有する今回の環境において、「ちっちゃなイエ」という内部での体験に収束しがちなテーマが、周辺の人々のためにもより良い環境を提供することに反転されている。この建築は、額縁という概念がもたらす、豊かさを得るための内部空間と地域に作用させるための外部空間、両者の関係の相互作用によって成り立っているといえる。

今回の受賞に関しては、修士2年というおそらく最後になるであろうキタスマ応募作品において最優秀賞という栄誉ある賞をいただけたことを非常にうれしく思う。今回のテーマ、また提出された作品群から、雄大な大地を前提とした内部と外部の関係性の新たな在り方を示すことが、北海道建築における永遠のテーマであることを再認識させられた。

第 42 回 北の住まい住宅設計コンペ最優秀賞受賞作品「額縁に住む」

